

第4の扉 (2001年～)

- 2000年 全国回復期リハビリテーション病棟連絡協議会 設立準備委員会を発足
- 2001年 全国回復期リハビリテーション病棟連絡協議会 設立総会
大田仁史 初代会長／石川 誠 常務理事
第1回研究大会(東京) 石川 誠 大会長
- 2002年 第1回研修会開催 本誌創刊
第1回回復期リハビリテーション病棟実態調査(以降、毎年度実施)
- 2003年 Web サイト開設 看護研修会開始
第3回リハ・ケア合同研究大会開催(東京)
石川 誠 大会長 医師研修会開催
- 2004年 リハスタッフ研修会開始
- 2005年 研修会を全職種研修会と改称
MSW 研修会開始 病棟管理者研修会開始
- 2007年 回復期リハ看護師認定コース開講
- 2010年 JJCRS 創刊
- 2011年 回復期セラピストマネジャーコース開講
設立10周年祝賀会
- 2012年 一般社団法人化
回復期リハビリテーション病棟協会設立
石川 誠 初代会長 理事30名 監事2名 体制
事務局を東京都渋谷区に置く
- 2014年 厚生労働省指定リハビリテーション専従医師
研修会開始
- 2017年 事務局を東京都千代田区内神田へ移転

仲間とともに連絡協議会へ 回復期リハビリ病棟協会へ

石川さんの思い出

みつはし たかし
三橋 尚志

京都大原記念病院 副院長

私が石川さんと初めてお話をさせていただいたのは回復期リハビリテーション病棟ができる前、老人の専門医療を考える会でのことです。丁寧にお話をさせていただきましたが、医師ワークショップで同席した近森リハビリテーション病院の若手医師が「現場ではとにかく厳しいです」と連発されたのを覚えています。2001年に当院が主催した研究会では講演とパネルディスカッションに参加させていただきました。当時、京都で回復期リハビリテーション病棟を運営していたのは当院だけで、何とか普及させたいと石川さんをお呼びしたのですが、参加者は石川節とリハビリテーションへの想いを一様に大絶賛していました。石川さんは当時私に「京都はリハビリテーション不毛の地だ」と話されていましたが、石川さんのお陰で今や回復期リハビリテーション病棟の激戦地となりました。

2005年1月、電話で「協会の理事をやってくれないか」と依頼され、同年5月から協会とのかわりが始まりました。石川さんからの電話がなければ今の私はありませんし、協会活動を通じて出会った数多くの同志との出会いもなかったでしょう。理事になったとはいえ特に何をしたともいえない2年間でしたが、2007年に石川さんが会長に就任されて状況は一変しました。石川さんは会長就任の挨拶で「これからは医師にも大いに汗をかいてもらいます」と宣言され、私は研修委員会に配属されました。当時委員長であった黒澤さんと石川さんが群大の同級生で盟友関係であることから、石川さんは何かあれば研修委員会の宴席に参加されました。石川さんと酒を酌み交わし話をするのは研修委員にとってこの上なく有難い経験であり、石川さんの一言一言が貴重な財産でした。

当時、石川さんには年10回ほど全職種研修会で講演をしていただきましたが、ある年「今年からは1回目の講演は私がするが、2回目からはスライド渡すから君たちでやってくれ」といわれました。まだまだ経験の浅い私は石川さんの講演を録音し、石川さんの言葉を一字一句漏らさず文字に起こしました。石川さんは「何でそこまでするの」と笑っておられましたが、そうしないと石川さんの想いを参加者に伝えることができない、それほど貴重な講演でした。2013年会長を退任される際に「常任理事をやってくれ」と電話があり、現在の常任理事6名体制が敷かれました。2018年9月に突然「会長をやってみないか」といわれ、熟考の末、翌年の会長選に立候補しました。

最後に石川さんと呑んだのは2020年7月です。私が東京に行った際にコロナ禍にもかかわらず一席設けていただきました。リハビリテーション以外にもラグビーや釣りなど大いに話は盛り上がりましたが、別れ際に「会長として思う通りにやりなさい」と声をかけられました。それが最後のお言葉ですが、思えば石川さんからのメッセージはいつも突然でした。まだまだご指導を仰ぎたいところですが残念でなりません。石川さんのご冥福をお祈りいたします。

石川さんの思い出

みやい いちろう
宮井 一郎

森之宮病院 院長代理

「これからそっちに行くから」突然、石川さんから週末に電話があり、2006年に開院して間もない森之宮病院を見に来てくださった。「僕もいろいろな病院を見てきたけど、この造りはおもしろいね」と各病棟に設けたリハ室や回廊型の廊下を跳ぶような早足で案内の私より先に歩いて回り、楽しそうに写真をバシバシ撮っておられたことを思い出す。帰りに「宮井さんやスタッフの想いが詰まっている病院だね」としみじみとお願いいただき、4年余りかけて完成にこぎ着けた仕事に、なにかご褒美をもらったような気にさせられた。おそらく石川さんはさまざまな出会いを大切にしながら、全国のリハにかかわる多くの病院や施設を俯瞰しながら応援されてきたのだろう。

10年ほど前のリハ医学会学術集会での出来事。私どもの施設の医師の発表で、大脳皮質～基底核ループにおける病変分布から運動麻痺の回復機序を解析する演題を、たまたま石川さんが聴いてくれていた。数週間後にお会いしたとき、「僕は脳外科医だったので、機能回復の中身に迫る研究って、面白く感じるんだよね」と時間をかけて熱っぽく語られた。当然、リハにかかわる人間にもさまざまなバックグラウンドがあり、ゴールが同じであってもそれを実現するためのアプローチは多様である。そのようなダイバーシティを容認されるスタンスも石川さんの魅力であった。

石川さんの言葉のトーンや言葉の間には、ある種の緊張と緩和のオシレーションがあり、日本のリハ医療の大いなる発展を願って自ら行動されてきたからこそその重みがある。職種や職位にかかわらず、相手にその言葉は響き、石川ワールドに引き込まれる。たとえ話の中身が概念的なものでも石川さんには抵抗なく受け入れられ、具現化できる気にさせられると同時にその力が与えられる。それらのベクトルを収束したものが、回リハ病棟協会における20年近くの活動の蓄積であろう。

たとえば、回リハ病棟の年次実態調査。石川さんの発案で始まったものであるが、同病棟の黎明期から蓄積された45万例近くのデータがその変遷をビビットに語っており、診療報酬をはじめとする制度の改革や病棟運営の進化の礎となった。協会創設時から石川さんといろいろな形で仕事をさせていただいたが、20年の間にいただいたさまざまなスパイスは他では得がたい宝物である。私も自分なりの形で、その普遍的なメッセージを次の世代へとつないでいかなければと考えている。石川さん、ありがとうございました。

石川 誠さんの思い出

そのだ
園田 茂しげる
藤田医科大学 七栗記念病院 病院長

2000年から藤田保健衛生大学七栗サナトリウムに移った私は回りハ病棟環境にいたものの、回りハ病棟そのものの発展に自らがかわるとは思っていませんでした。そんな私に回りハ病棟(協会)への帰属意識をもたせてくださったのが石川 誠さんです。石川さんを私に引き合わせてくれたのは澤 俊二さん(作業療法士、慶応義塾大学月が瀬リハビリテーションセンター時代の同僚で、藤田保健衛生大学に移っていました)です。以前に澤さんが大田仁史さんのインタビューをされていたご縁もあり、石川さんの藤田リハ来訪を整えてくれたのです。

石川さんは2005年1月に七栗を見学され、七栗のシステムを気に入ってくれました。6m幅の廊下の真ん中に石川さんが立ち、満足そうにしている写真は私の宝物です。その後すぐに私と七栗を回りハ病棟協会に引き込んでくれて、1か月後には研究大会のシンポジウムの演者として登壇していました。石川さんのぶれない進みかたに惹かれ、それ以降、私の外向け活動のメインフィールドが回りハ病棟となり、微力ながら回りハ病棟の発展に努力することとなりました。疑問に思うことなく日本リハ医学会のほうにいた私の社会活動35年の後半の方向を決めてくれたのが石川さん、ということになりますね。

石川さんのご講演は内容が素晴らしいだけでなく、無駄な言葉がありません。多くの演者が、えっとー、あのー、と無意識に挟んでしまうわけですが、石川さんのご講演にはそれが無い。真似しようとしたが無理でした……。石川さんと対面でお話しすると、吸い込まれるように聞いてもらえて、その後おもむろに意見が戻ってきます。あの受け止めがあるから、粘り強い交渉も成就させることができたのでしょう。それでも実直にものをいわれるがためにいやがらせを受けて辛い思いの続いた経験をそっと教えてもらったこともあります。厚生労働省の医系技官がずらっといる前で回りハ病棟を作るべきとの持論を話す際はビビったと聞いて石川さんも人の子だったんだ、と思ったりもしました。

石川さんが診療報酬対策の主体であった時期、医系技官から石川さん経由でオーバーナイトの仕事がよく降ってきたのも懐かしい思い出です。夕方に石川さんから「もしもーし、園田さーん」と電話がくると、他の仕事を放り出して統計ソフトやエクセルと取っ組み合ったものです。もう、電話がかかってくることはないんだ……。都合の悪いデータも隠し立てしない石川さんのスタンスは厚生労働省との信頼関係を生み、リハビリテーション医療の発展につながったと思います。回りハ病棟協会のスタンスは今も同じ、隠し立てのない付き合い方をしているつもりです。石川さんに「よくやった」といってもらえるよう、皆で頑張りたいと思います。

石川さん、これまでありがとうございます。そして、これからも見守っててください。

石川 誠先生を偲ぶ

にしむら ひとし
西村 一志

やわたメディカルセンター 副院長

石川先生に「チームアプローチ」を行うには、全職種が互いに「～さん」と呼び合うのが当たり前であることを教わり、普段は「石川さん」と呼ばせていただいていた。ただ、二人だけの時は師として「先生」と呼ばせていただいていたので、ここでは「石川先生」とさせていただきます。

初めてお会いしたのは、私がやわたメディカルセンターに就職し回りハ病棟の専従医になった2004年初夏、当院の職員20名ほどで初台リハビリテーション病院を見学させていただいた時でした。その時の第一印象は「器の大きい熱い人」でした。

2007年に当協会の理事の末席に加えていただき、その後石川先生には公私ともに大変お世話になりました。研修委員会委員として、全職種研修会、医師研修会等で石川先生のご講演を何度も聴かせていただき、回りハ病棟とは何かを一から学ばせていただきました。しかし講演以上にその後の飲み会でのお話が私を成長させてくれました。

2012年度の回りハ病棟協会研究大会の担当が当院と決まった時、ジャズシンガーの綾戸智恵さんの特別講演（お母様の介護の経験談）を思いつき、無謀にもその出演交渉を主治医だった石川先生にお願いしてしまいました。数か月後、「講演は難しいぞ」といわれましたが、「だめです、ぜひもう一度交渉してください」といって、かなり困った顔をさせてしまいました。

数か月たった2012年の春、「初台リハビリ病院の10周年記念式の席で紹介する」と連絡をくださり、結果、綾戸さんの「トーク&ライブ」開催が実現しました。石川先生のお口添えのお陰と深く感謝すると同時に本当に失礼なお願いをしてしまったと反省しました。

プライベートでは度々先生がお好きだった小松の日本料理店や蓼科の別荘で妻と先生ご夫妻とで一緒させていただきました。蓼科ではテラスの下の谷地の草刈り、枝打ち、遊歩道の整備と一緒に汗を流したことがよい思い出です。病院の経営や運営についても教えていただきました。初台リハビリ病院の開設時やその後の経営についてお話していただきました。その中で「よいことをすれば制度は自ずと後からついてくる」といわれたことが印象に残っています。

また、石川先生の「誠」の名付け親と伺っている渋沢栄一の『論語と算盤』を紹介されました。今年の大河ドラマ『青天を衝け』を観ていると、「皆が幸せになる」「損得抜き」など渋沢栄一と石川先生の考え方がよく似ていると感じます。

石川先生にはまだまだわれわれの先頭に立って引っ張っていただきたかった。しかし、「お前たちは俺をいつまで働かせるんだ」と時々いわせていたことに、申し訳ないことをしていたのかなと後悔しています。リハビリテーションにおける石川マインドを次の世代につなげることが、ご指導いただいた者の使命と思い前進していきます。天国から見守っててください。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

思いを継ぐ

おかもと たかつぐ
岡本 隆嗣

西広島リハビリテーション病院 院長

中学生の頃、夏休みに家族で旅行に出かけた。行き先は高知県。桂浜や土佐闘犬などを楽しんだ。その数年前に父がリハ専門病院を開業してからわが家は両親ともに忙しく、久しぶりの旅行だった。途中で父は「ちょっと行ってくる」と一人別行動をとった。病院見学をしてきたらしい。といっても病院は休みで勝手に一人で中に入ってウロウロしていたようだ。広島までの帰り道、父が運転しながらその病院の様子を一人でずっと喋っているのを家族は呆れながら聞いていた。

これが近森リハ病院との最初の出会いだった。インターネットもない時代、父は知っていたのか、偶然見かけたのか、今となってはわからない。後日、石川さんは「お前の親父さんが一人で病院を見て帰った後、正式に見学の申し込みがあった。初めて会った時、あっ!と思ったよ。俺の大学ラグビー時代の宿敵、順天堂大学のフォワードの男だった。でもグラウンドの外ではノーサイド、すぐに意気投合しちゃってさ。(日本リハ病院・) 施設協会の仕事で親父さんが上京してきた時、伊藤隆夫(敬称略)と3人でいつも朝まで飲んでたよ」と教えてくれた。

大学3年生の時、父を白血病で亡くした。その年の暮れ、石川さんと栗原さんの近森リハ病院長交代の宴に父の代理で出席した。アメリカンフットボールの練習で真っ黒に日焼けして着慣れないスーツ姿。場違いなところに来てしまったと緊張している私に、「ここにいるのは皆リハの仲間だから。困ったらいつでも頼って来い」と声をかけてくれたのが石川さんだった。

次にお会いしたのは、母校でリハ医として働いて専門医を取得し、広島に帰ることになった時だった。当時患者さんのデータを論文にまとめて発表し、その仕事が認められ研究費をもらったばかり。その途中での帰りで、東京での仕事に未練がある気持ちを素直に打ち明けた。石川さんは居酒屋に連れて行ってくれ、初めて一緒にお酒を飲んだ。「とにかく、仲間を作って実践することが大事なんだ!」。高知で最初、病棟スタッフから総スカンを食らった、病棟が軌道に乗って退院後の訪問診療を始めたら、自分が地域生活をまったく知らなかったことに気づいて愕然とした……楽しそうに話してくれた。いつの間にか私の気持ちは広島に向かっていた。

石川さんから声をかけられ協会の仕事をするようになって、お酒の席では高知時代の苦労や思いを何度も話してもらった。小さい子供が親に同じ昔話を何度も読んでとせがみ、主人公の活躍に胸躍らせたように……。父とリハビリの話をするのが叶わなかった私にとって、石川さんはリハ業界における父親のような存在だった。数年前、「親父さんの墓参りがしたい」と広島に立ち寄ってくれた時に二人で飲んだのが最後のお酒になった。

同じ病院で一緒に働いたわけでもないが、石川さんのDNAは自分の中に刻み込まれている気がする。石川さんの実践やその話に魅了された全国の人たちも、私と同じ思いを抱えていることだろう。思いに共感し、思いを継ぐこと。これが残されたわれわれの使命だと思う。

石川先生の思い出

うかい やすみつ
鵜飼 泰光

鵜飼リハビリテーション病院 院長

まだ思い出になっていない。でも、もうお会いすることはできない。最後にお会いした時もいつもとお変わりなく穏やかな石川先生だった。石川先生を思うと「温かい」「大きい」そして「親分（師匠）」という言葉が浮かんでくる。

思い返せば1996年3月23日の日本リハビリテーション病院協会（現 病院・施設協会）の第6回医療研修会で初めてお目にかかってから四半世紀。リハビリテーションをやろうと決心して石川先生を親分と思い今日まできた。困った時にいつも相談させていただき、助けていただいた。先生のお顔を見て穏やかな声を聞くだけで安心できた。食事やお酒を伴にいただきながらの時間は楽しくあつという間に過ぎる至福の時だった。もともと外科医であった私が回復期リハビリテーションの世界にいられるのも全部石川先生のおかげだ。

日本リハビリテーション病院協会のその研修会で、石川先生が当時近森リハビリテーション病院で実践されているリハビリテーション病棟のご講演を聴いて、近森リハビリテーション病院を見学させていただき鵜飼病院にリハビリテーション病棟を作り、2000年、120床で鵜飼リハビリテーション病院を作った。そして2011年に150床へ増床した今の鵜飼リハビリテーション病院を作った。

最初リハビリテーション病棟を作る時には近森リハビリテーション病院をスタッフ30人以上が見学させていただいた。鵜飼リハビリテーション病院を始めてからは初台リハビリテーション病院で当院PT・OT・ST10人くらいが一人1～2か月の研修をさせていただいた。折に触れ当院へお越しいただきスタッフにご講演、OJTをしていただいた。無理なお願いも聞いていただき鵜飼リハビリテーション病院を少しずつ前進させていくことができた。石川先生のおっしゃることを実行しようともがいてきた。

しかし、今の病院の開院式にいらっしゃった時の石川先生の言葉には驚かされた。

「本当に建てちゃったな、大丈夫か？」と。

始まりは2008年の秋に当院へお越しいただいた折、今の病院の土地を目にされ、「ここに新しく病院を建てろ」とおっしゃった。翌週には初台リハビリテーション病院、長崎リハビリテーション病院を設計された岡田新一設計事務所の柳瀬さんが当院へ来られ、銀行融資もOKとなり、とんとん拍子に進んで病院ができ上がり2011年5月10日に開院式を迎えた。

開院式当日、私の部屋でお茶を飲まれながら先生はそうおっしゃった。

私はえっ！ 石川先生が建てろとおっしゃったから建てたのに、大丈夫じゃないんだろうか？ と、一瞬青くなった。お顔が笑っていらっしゃったので冗談とわかったが、聞いた時は倒れそうになった。それからこの話が出ると石川先生は「建ててよかっただろ」と笑いながらおっしゃっていた。ありがとうございました。

石川さんのフェアの精神

かけひ あつお
笥 淳夫

工学院大学建築学部 学部長・教授

1995年初夏。新宿ゴールデン街の小さな飲み屋で、バーカウンターの内側から「今日の石川先生のお話、面白かったです」と声を掛けたのが石川先生との初めての出会いだった。

当時、私の勤めていた国立医療・病院管理研究所の勉強会に、石川先生がわざわざ高知から講師として来てくださったが、私は仕事の都合で最後の30分ぐらいしか参加できなかった。

しかし、その話の一部を聞いただけでも、石川先生たちが高知で行っている取り組みが非常に魅力的に聞こえた。その夜、当時毎晩のように通っていた飲み屋で飲んでいると、研究所の同僚だった小山秀夫先生が石川先生を連れてきた。常連だった私は席を譲るためにカウンターの中に立ち、冒頭の一言をかけたのだ。残念ながら先生の話すべてを聞くことができなかったこと、高知での活動がすごく新鮮で興味があることなどを話すと、いきなり手帳を出し「それじゃいつ来る？」と仰ってくださいました。そしてその年の8月8日から丸2日間をかけて、近森リハビリテーション病院を中心としたリハビリテーション医療から、在宅支援までのほとんどのプログラムを徹底的に見せていただき、その「新しさ」と「凄さ」に圧倒された。

そこから石川さんとの付き合いが始まった。そのうちに、回復期リハビリテーション病棟の制度が始まり、それと同時に全国回復期リハビリテーション病棟連絡協議会が設立された。その時期、石川さんに急に呼び出され「回復期リハビリテーション病棟ができたけど、この病棟がどのような成果を上げているのかを時系列で確認することが必要だと思う。その調査をやってもらえないか」との依頼だった。現在でも実施している回りハ病棟協会の実態調査のはじまりである。

この調査に関しては、石川さんから一切の指示がなかったように記憶している。それどころか、たまに回りハ病棟に都合の悪い結果が出たときに、「こんな結果が出ていますが、どのように発表しましょうか？」と私が尋ねても、「そのまま発表していいよ。笥さんの思うようにしてください」といわれ続けた。この何事に対してもフェアの精神が石川さんのイメージ。

毎年2月から3月に開催される回りハ病棟協会の研究大会でこの調査結果を報告しているが、その際に開催されるのが全体の懇親会。これが私にとってはずっと大きな楽しみだった。これまで、工作上、役割上、さまざまな学会・団体・協会などの懇親会に参加してきたが、この研究大会の懇親会ほど、施設や職種や立場を超えて、飲食をともにし、楽しく語らう懇親会を見たことがない。その姿を見るだけで酒の肴になる。これが回復期リハビリテーション病棟のチームアプローチなのか。そしてここにも石川さんのフェアの精神が息づいている。

石川さんに献杯。

石川さんと過ごした研修委員会の思い出

くろさわ たかし
黒沢 崇四

初代研修委員会委員長 NTT東日本伊豆病院 元院長

日本の医療の流れを変えた偉人、石川 誠さんの訃報をお聞きした時、その事実を受け入れられず大いに落胆し、その夜はずっと寝つけず、まんじりともせず夜を明かした。

石川さんと諸先輩方は、日本の矛盾した医療の流れを変えるべく獅子奮迅の努力をされ、その結果、2000年に回復期リハビリテーション病棟が正式に制度化された。この翌年、石川さんを常務理事（後に会長）に全国回復期リハビリテーション病棟連絡協議会が結成された。その後の協会の発展と回復期リハビリテーション病棟の隆盛は皆さまご承知の通りである。この間の石川さんの八面六臂の活躍とお人柄はこの追憶文集で多くの方が述べてくださるはずなので、私は石川さんに研修委員会の初代委員長を託されて以後およそ年間10回の出張研修での出来事を中心に述懐してみたい。

当時、研修会は職種別のほかに全職種研修会があって最も人気が高く、特に冒頭の石川さんの講演が圧倒的に人気であった。私たちはこの石川さんの講演が自慢で「石川 誠座講演」と名付けて全国を巡った。石川さんもこの呼称を後に知り、嬉しそうに苦笑いをしていた。

石川さんはおそらく日本一の講演の名人である。ゆったりとした静かな語り口で始まる緩急自在の名講演は、研修会一の自慢であった。スライドの美しさと明快さも抜群のセンスである。乱雑になりがちなカラーを使わずに、簡便な文章とわかりやすい図表の配置もさすがである。文字のフォントも練りに練ったもので美しい。私もそのスタイルを真似させてもらったが、やはり二番煎じの哀しさで似て非なる出来栄えとなるのが常であった。

石川 誠座の出張研修でありながら、石川さん本人が都合で来られない時もあった。その時は私が石川さんのスライドを借りて代役講演する羽目になるのだが、これが辛かった。研修会では終了後に毎回参加者のアンケートで講演者が評価を受ける。石川さんの名講演は80%以上の参加者から「良かった」の評価を受けるのが常であったが、私の代役講演への「良かった」はおおむね30%台で、いつも申し訳なく思ったものだ。

北海道から沖縄まで各地を移動する中で驚いたのは、石川さんを知るあるいは支える知己の方々の多さである。それも医師だけに留まらず各職種にわたる多彩さである。しかも、その方々の氏名をすべて覚えていることが驚きだった。石川さんは抜群の記憶力ゆえに博識王でもある。したがって、石川さんとともに過ごす宴席の楽しさは格別である。懇親会終了後の二次会でも、石川さんの人柄を慕って多くの参加者がそのまま移動され石川さんの周りは足の踏み場もないほど盛り上がったものだ。書きたいことはまだまだあるが、誌面と筆力が尽きたようだ。

もう石川さんと宴席で一献傾けながら語り合うこともできないなんて……哀しすぎる。

傑出した組織者 石川さん

みやさと よしかず
宮里 好一

タピック沖縄リハビリテーションセンター病院 理事長

澤村先生が会長のとき、日本リハビリテーション病院協会の常務理事に石川先生と浜村先生が就任した際、石川さんに「会長の助さん格さんになるんですね」といったら、いつもの渋い笑顔が返ってきました。浜村先生は地域リハビリテーションの確立に全力を挙げ、石川さんはリハビリテーション医療の可視化、客観化とデータ化に取り組み診療報酬の拡大に尽力されていました。高知県にて勤務時代に、「数字をまとめるのに部下をこき使ったよ」とつぶやいていました。強い意志を貫き時代を動かしていく人のすごさ、そして苦しさを垣間見た思いでした。

2016年に回復期リハビリテーション病棟協会第27回大会が沖縄で開催されました。講演を依頼した時「今までに話したことのない話が聞きたい」と無理な注文をしたら、これまでにないデータを含めて整理して応えてくれました。「うかうかできんぞ、リハビリテーションの転機が迫っている」と。

私にとって、石川さんはまだまだ謎の人でした。いろいろと突っこんで聞いたかったことや議論したかったことが残ってしまったからです。「精神科は異次元の世界。会話が通じにくい」とある場で精神科医出身の私にいつか来ました。なにかあったのだろうか。「精神障害のリハビリテーションとの接点はないでしょうか、発達障害、認知症、高齢化する統合失調症のある方など、地域にたくさんいます、同じ障害として協働できるようにならないでしょうか」などと質問をぶつけて話したかったのです。

石川さんのリハビリテーション分野の功績については皆さんから語られるでしょうから、経営者の立場から見るところに触れたいと思います。リーダーにとってもっとも重要で難しいのは部下の育成だといわれます。この25年余の石川さんの歩みをみると、東京のど真ん中で、本格的なリハビリテーション専門病院を初めて立ち上げました。その中で人材育成に注力し、そして立派な後継者を選んでいるように思いました。訪問リハビリテーションの確立と全国組織の設立を成し遂げるなど全国的なリーダー育成にも寄与しています。また介護福祉士を回復期リハビリテーション病棟に配置したり、次々と職種を超えて新しい制度変化を促進し、実現しました。経営の立場にある私にとって、石川さんを一言で評するとすれば、「傑出した組織者」であると浮かびます。ラグビーで鍛え上げた頑強な身体とチーム感覚を土台に、現実との格闘をいとわず、新しいリハビリテーション提供体制の充実、人材の質の向上に全力を尽くし続けた石川さん。もっと話したかった。

石川さんの群馬大の同期、那覇市の大道中央病院・高良 健理事長と3人で酒を酌み交わそうというあの沖縄大会の懇親会場、東南植物楽園での約束は実現しませんでした。

釈迦と孫悟空

こんどう くにつく
近藤 国嗣

東京湾岸リハビリテーション病院 院長

石川さんを知ったのは、石川さんが成し遂げられた回復期リハビリテーション病棟の制度化を通してであった。その頃私は急性期病院のリハビリテーション科医として勤務していたが、医師経験15年のうち8年間は回復期リハビリテーション医療の現場で働いていた。回復期リハビリテーション病棟が制度化される以前の回復期リハビリテーション医療は、公的病院や温泉地病院が中心で、まだ裾野の狭い医療であったため、私自身は、自らの専門性と技術に傾注しており、制度作りなどには何ら関心はなかった。また、数は少ないがリハビリテーション専門職や看護師といったスタッフ間のコミュニケーションは良好で、リハビリテーション科専門医をリーダーとしたチーム医療を実践できていることに誇りをもっていた。

そのような私にとって民間、都市型、チーム医療を中核に据え、当時のリハビリテーション医療では想像できないほど多くのリハビリテーション専門職が働く専門病院——初台リハビリテーション病院という新しいコンセプトのリハビリテーション病院——の登場は、衝撃的であった。

その後しばらくして、私も多くの専門職が協働する新たな回復期リハビリテーション医療に、リハビリテーション科専門医としてチャレンジすべく、急性期病院から現在の病院に職を転じた。

石川さんの存在に大いなる関心と興味をもちながらも、私が初めて石川さんと話をさせていただく機会を与えられたのは、2010年秋の日本リハビリテーション医学会専門医会の際に開催された「第1回 回復期リハビリテーション病棟で働くリハビリテーション科医の会」であった。そして孫悟空のように尖っていた私であったが、石川さんの懐の深さで、翌年に当協会の理事にご推挙いただいた。その際の回復期リハビリテーション病棟研究大会in長崎では「石川 誠と100人の仲間たち」と題する宴会に参加させていただき、その信望の厚さとエネルギーに圧倒された記憶が鮮明に残っている。

それからは協会やさまざまな会合で一献を交える機会を多く与えられ、石川さんの人生経験と叡智、これからのリハビリテーション医療のあるべき姿、そして何よりも情熱を学ばせていただいた。また時には議論もさせていただいた。ラガーマンである石川さんに対して、生意気にもアメフトあがりの私なりの考えを話したこともあるが、すべて回復期リハビリテーション病棟という石川さんの創り出したフィールドがあつてのことであり、石川さんの手のひらを走り回っているだけの自分に気づかされた。

石川さんが亡くなられた今、その功績、そしてお人柄を思い起こすだけでなく、さまざまな課題が生じた際に、石川さんだったらどのように判断されただろうと思ひ悩む日々である。遺された弟子の一人として、そのマインドを胸に、回復期リハビリテーション病棟の理想を目指す旅を歩み続けたい。

石川先生の思い出

あなみ まさし
穴見 雅士

株式会社エムビーテック 代表取締役

2020年10月14日に「と村」さんにご一緒させていただいたのが石川先生との最後の食事となりました。私の好みが和食であることから幾度となくお誘いいただき細やかな気配りをいただきました。そこには先生一流の心遣いがあったように感じております。お店がまだ赤坂見附にあり初めて伺った時に「どうだい……美味しいでしょ」といわれたことは今でも忘れられません。一輪挿しに活けられた青紫の鉄仙が強い記憶となって残っています。

2021年5月8日に「状況報告」と書かれたショートメールを頂戴いたしました。翌日ご自宅にお伺いすると、どこか他人事のようにご自身のこれまでの経緯や状態を詳しく話されました。最後は「戦友だからね。きちんと伝えておかなきゃ」といわれ、動揺する気持ちを抑えて「横になって休んでください」と申し上げるのが精一杯でした。笑顔で話される厳しい内容に硬直しましたが、きちんとした先生らしい矜持であったのだろうと思われます。

何年頃であったか、私が前職（情報機器メーカー技術部門のSE）の頃、高知県の近森リハビリテーション病院様へ伺うことがあり、そのことが先生との出会いのきっかけとなりました。

初台リハビリテーション病院様の開院にあたり、回復期リハビリテーション病院向けの電子カルテの開発依頼を受けました。なにぶん依頼する側もされる側も「回復期リハビリテーション病棟」に求められるシステムが漠としており、詳細は何も掴めていない状況でした。そのような中、先生からのご要望は「患者様に関するすべての情報を全職種がいつでも共有できるシステム」でした。この時、回復期に求められるニーズをきめ細かくお教えいただいたことは、私にとって貴重な財産となりました。

正味8か月弱という極端に短い納期中、無形から有形へシステムを完成させることは大変苦しい作業でした。それでも作り出す喜びが希望となり頑張れたのだと思います。開院当日に「何とかなったね」とおっしゃっていただき報われた思いがいたしました。このような経緯から戦友と呼んでいただけたのではないかと思います。一緒になって目標を達成する喜びを身をもってお教えいただいたと深く感謝しております。

先生がお亡くなりになってから何か変化があったかと問われれば「特に変わりはありません」と答えています。石川先生の「真摯に向き合う」姿が私の中でそのまま生き続けているからだと思います。

しかしながら、蓼科でキャンピングカーの中、満天の星空を眺めながら酒を酌み交わし、たわいもない話をしながらどちらともなく眠りにつくことが叶わなくなりました。叶わぬゆえの寂寥感が少しずつ広がってきております。

石川先生

とむら きみお
戸村 仁男

虎ノ門 京料理 「と村」 店主

先生と私の出会いは26年前、私が初めて店を開店して2日目のことでした。始めたばかりでどうなるか、続けていけるか、無我夢中の時でした。

夕方からバケツをひっくり返したような雨で傘をさしても歩けません。その時予約なしで店に入ってこれ、食事ができるか、席は空いているか、聞かれました。あとから思うとあまりにも偶然の出会いでした。その時、どんな料理をお出ししたかは忘れてしまいましたが、先生には大変に喜んでいただき、その後はご贔負^{ひいき}を最後まで賜りました。

先生の好みは、目先の物よりも本質を見る突き詰める仕事であるようでした。料理を通して、その人を見ていたような気がしました。駆け出しの私をここまで育ててくれたのだと思います。

石川先生と私のお互いの趣味である鮎釣りで思い出が一番多くあった気がします。初めは私がしていたのですが、先生はキャンプが好きでついでに釣りもしたいとのことでした。

鮎釣りは釣りの中でも非常に難しい釣りで一筋縄ではいきません。皆、何年、何十年もかけて一人前です。また、鮎釣りは一年のうち釣りができる期間が3～4か月と短いので、腕はなかなか上がりません。しかし、この難しい釣りが相性に合ったのか、その後鮎釣りは先生のライフワークになっていったと思います。

自然はいつも違う顔を見せ、人の思うとおりになりません。それを受け入れ、しかし持ち前の負けん気で努力を尽くし、楽しんでいました。

ホームグラウンドは青森県の白神山地を流れる赤石川という川で、「金鮎^{きんあゆ}」が釣れる川です。真っ黄色の鮎はヌルヌルで、大物は片手ではもてません。先生はただ釣りをしに行くだけでなく、地元の人たちとも親交を深めていました。自然、人を愛していたのだと思います。今年も青森に行きましたが、皆大変に驚き、悲しんでいました。皆、先生に深く信頼を寄せ、先生は皆から尊敬されていました。

青森はお盆を過ぎると朝夕は寒く、秋めいてくる土地です。「秋茜^{あきあかね}」という赤蜻蛉^{とんぼ}が空を赤く染めるほど飛んでいます。釣りをしていると釣り竿や腕、ありとあらゆる所に止まり、気持ちを楽しませてくれます。先生も釣りをしているかなあ、蜻蛉を見ているだろうか、思いは尽きません。本人の気持ちを考えると、もう少しがんばる時間があればと悔しく残念でなりません。

私事ではありますが、これからも精進し、お客様のご期待に添えるよう全力を尽くすことが先生の気持ちに伝えることと信じ、信用されるようがんばります。

石川先生、長嶋さんではないですが、先生は永遠に私の心の中で生きています。

心より感謝申し上げます。

全国のリハを育てる熱意に感謝

はしもと しげき
橋本 茂樹

札幌溪仁会リハビリテーション病院 副院長

1990年6月。札幌の時計台病院と近森病院が姉妹病院の締結をすることになり石川さんが高知から来札。屋上パーティーで大きな鮭を丸ごと使ったジャンジャン焼きを食べてもらいました。それが初めての出会い。その後、登別厚生年金病院での勤務時代、石川さんに登別で講演を依頼、久しぶりの再会でした。2007年札幌に戻り札幌西円山病院に勤務となり同年協会の理事に。その年、北海道回リハ病棟協会を立ち上げ、その後は診療報酬改定のたびに、真冬の2月頃に札幌でご講演いただきました。講演依頼は断られたことはありません。

若者たちと一緒に懇親会はいつも大盛り上がり。「北海道のスタッフは元気がいいな」が嬉しかったです。2次会は北海道産の海鮮料理。「北海道のキンキは焼いても煮てもおいしいな」と、北の味を楽しんでいただきました。6月頃「ビールに合うよ」と絶賛だった北海シマエビを時々ご自宅へ。札幌での講演後、宿泊先へ一緒に歩いていた時、奥様に電話され「横にいるからお礼いって」と、突然で恐縮したのを覚えています。2017年の当院の開院式典で「初台に似てるね」って、当然です。何度初台にお邪魔したでしょうか。いつもあの笑顔で「よく来たね」で出迎えてくれました。日本の回復期を中心にしたリハを育てていこうという思いで全国を飛び回っていたあなたの熱意をいつも感じていました。感謝しかありません。

私たちは絶えず進歩すべき

おおい きよふみ
大井 清文

いわてリハビリテーションセンター 理事長・センター長

当協会相談役の石川 誠先生のご訃報に際し、ご家族、関係者の方々に心よりお悔やみを申し上げますとともにこれまでのお力添えに深く感謝申し上げます。

先生といわてリハビリテーションセンターとの関係は、私の上司 高橋 明との関係から始まります。先生は公的病院をあまりお好きではなかったのですが、高橋と同じ脳神経外科ご出身という縁もあり、当センターに対してはさまざまなおことごとくご配慮をいただきました。

殊に、当センターの病棟をすべて回復期リハビリテーション病棟に移行するにあたり、先生をはじめ初台リハビリテーション病院の方々に何度もご指導をいただき、また、回復期リハビリテーション病棟の運営以外についても、先生より直接のご指導を賜り、感謝してもしきれません。

先生からは、回復期リハビリテーション病棟協会での仕事はもとより、全国リハビリテーション医療関連団体協議会の報酬対策委員会では、厚労省との関係も含め、本当に勉強させていただきました。そうした場で先生の偉大さを改めて感じた次第です。

先生とお話をしていて決して忘れないことは、患者さんや障がい者の方々に寄り添うこと、そして私たちは絶えず進歩すべきだということです。リハビリテーション専門医としてのあり方も含め、今後とも先生の教えを守りながら、仕事を続けたいと思っております。

先生、本当にありがとうございました。

リハ医療への情熱、行動力を学べた

わたなべ すすむ
渡邊 進

熊本機能病院 副院長

初めて石川先生と直接お話しできたのは2001年4月、当院会長・米満弘之の計らいでドイツの病院・施設での先進的リハビリテーション視察旅行に同行させていただいた時でした。この外遊旅行中、石川先生がこれからの日本における回復期リハビリテーション病棟の重要性、365日リハビリテーション・多職種によるチーム医療の必要性、療法士の病棟専従、介護保険でのリハビリテーションなどについて熱く語られるのを拝聴でき、先生の走ってこられたリハビリテーション医療への情熱と行動力を学ばせていただきました。この機会を得たことは私自身や熊本機能病院の回復期、生活期リハビリテーションに強く革新的な影響を及ぼしました。

2007年2月に第9回研究大会（米満弘之大会長）を熊本で開催した際は、基調講演、市民公開講座をいただき、閉会后、握手とともに開催のお礼と^{ねぎら}いの言葉をいただいたのをよく覚えております。2021年2月に第37回研究大会in熊本で先生の特別講演を予定し、好物の馬刺しでおもてなしするのをとても楽しみにしていましたが大会中止となり、残念でなりません。

石川先生の門下生の一人（自分で勝手に思っております）として、リハビリテーション医療を学ばせていただいた幸せを実感しています。心からの感謝の気持ちを捧げます。

誠にありがとうございました。

回復期リハビリテーション病棟の原点

はなやま こうぞう
花山 耕三

川崎医科大学附属病院 リハビリテーション科 部長

石川 誠さんに最初にお目にかかったのは、私がリハビリテーション加賀八幡温泉病院（現 やわたメディカルセンター）に勤めていた1990年代の初頭でした。当時、石川さんが立ち上げられた近森リハビリテーション病院は斬新なリハビリテーション病院だと聞き、見学のため訪問させていただきました。重症度別病棟、一病棟一主治医など当時の常識では考えられないシステムとともに、その時に石川さんが発せられた数々の言葉を鮮明に覚えています。その大胆な発想とともに、それを病院の形として具現化し、成功させたことは大きな驚きでした。

石川さんは、リハビリテーション病院への転院の適応を判断するために隣接する急性期病院をたびたび訪れたり、退院後の患者さんの訪問診療をされたりと、回復期を中心に急性期から生活期までを見通して活躍されていました。その後、私が関東に異動し石川さんも東京のほうに移ってこられた時に再会しましたが、常に気さくに声をかけていただきました。石川さんは、わが国の回復期リハビリテーション病棟のシステム構築の中心人物であることは申すまでもありませんが、その原点を高知で見る機会があったことは、私の貴重な経験となっております。

訃報に接し、このような思い出が頭を駆け巡りました。偉大な方を亡くしました。

謹んでご冥福をお祈りします。

初対面で激励の言葉

まつもと しげお
松本 茂男 あおもり協立病院 リハビリテーション科 部長

石川先生に初めてお会いしたのは1992年頃だったように思います。小生が研究会で上京し東大の上田 敏先生とお会いしている時、上田先生に「これから高知の石川 誠が来る、一緒に会ukai」とお誘いされ、その時は石川先生のことをほとんど認識できておらず、後にこのことを思い出すと冷汗三斗れいかんさんとなります。この時、石川先生が私と同じ第4回リハ専門医試験合格と知り、石川さんから「私と松本さんはリハ医の同級生だ。一緒に頑張っていきましょう」と激励の言葉をいただいたことが懐かしく思い出されます。

青森県鱒ヶ沢町あかいしがわに、赤石川という清流があります。源流は世界遺産の白神山地で、この川に生息する鮎は魚体が金色を帯びていることから「金鮎さんあゆ」と呼ばれています。石川先生の趣味が溪流釣りであることは皆様もよくご存じの通りです。石川さんは夏、滅多にとれない休みがとれるとこっそりと赤石川を訪れ、鮎釣りを楽しまれたようです。

協会の懇親会の席上だった気がします。先生のご予定を偶然知ったときのこと、「松本さん、完全フリーの夏休みですからF先生(私の師匠)には絶対に内緒にしておいてくださいよ」と茶目っ気たっぷりに、先生には不釣り合いな小声で耳打ちされたことが懐かしく思い出されます。この夏は今までの忙しかった日々から解放され、天国で鮎釣りを楽しまれているのでしょうか。どうぞゆっくりとさせていただきます。 合掌

愛媛のリハ史塗り替えた石川 誠さん

ふじた まさあき
藤田 正明 伊予病院 院長

石川 誠さんに初めてお会いしたのは、1995年の愛媛県リハ医学研究会での講演でした。チーム医療や地域リハを熱く語り、私たちが目指しているものだと確信しました。近森リハ病院に何度か見学に行き「追いつけ、追い越せ」を合い言葉に活動してきました。当院の「老人寝たきり病院」から「リハ専門病院」への転換点です。2000年4月以降は回りハ病棟が次々と開設され、伊予のリハ医療の夜明けとなりました。

2009年2月の夕方、突然石川さんより電話がありました。協会理事と医療安全委員会委員への就任要請でした。強い押しに負けてお受けしました。この活動を通して伊予・愛媛の地に全国の仲間たちの活動を紹介する機会を得て、2012年11月、愛媛県回復期リハ連絡協議会設立につながりました。記念講演では石川さんより愛媛の仲間にエールをいただきました。2015年2月には回りハ病棟協会研究大会(テーマ:進化する ものこそ光れ 回復期)を開催。宮井さん、園田さんと石川さんとの鼎談は好評でした。愛媛のリハ医療に進化をもたらしたのです。

これからは、成熟期です。私たちは、リハマインドをもとに、伊予・愛媛のリハを発展させていきます。石川 誠さん、今後は私たちの活動を見守っててください。 合掌

回復期リハチームのキャプテン

すみた さとし
角田 賢

錦海リハビリテーション病院 病院長

石川さんとはいつもラグビーの話をしていました。2019年のラグビーワールドカップ、ジャパンの大躍進と一緒に喜んだ日をついこの間のこのように感じます。石川さんからいただいたメールを見返してみると、最後のメールもラグビーの話題でした。サッカーや野球など他のスポーツと異なり、ラグビーでは、試合が始まると監督やコーチは観客席にいてグラウンドで直接指示をすることができません。すべてはキャプテンに委ねられます。常に患者さんのそばでチームを引っ張り続けた石川さんは、私たち回復期リハチームのキャプテンでした。

私が石川さんに初めてお会いしてから今年で20年、初めてお話ししたのは、松江市で開催された地域リハビリテーションの研修会でした。今錦海リハビリテーション病院で一緒に仕事をしているOTさんが、その時の資料をまだもっていて、今回見せてもらうことができました。

根拠に基づいた現状認識、目指すべき理想、そのためにやらなければならないこと、20年前の資料も今年聞かせていただいた最後の講演も、その根幹がまったく揺るがないことに改めて感動しました。医療状況の変化に対応して変わっていかなければならないこともたくさんありますが、「住み慣れた場所でその人らしい生活」を目指すことに変化はありません。

「ポイントピア」石川さんの掛け声とともに、私たちの原点でスクラムを組んで、これからもプッシュし続けていきます。

喫煙所

おおた としお
太田 利夫

西宮協立リハビリテーション病院 名誉院長

研究大会の喫煙所でひときわオーラがあり、多くの人が集まっていたのは石川さんでした。

石川さんと初めて個人的にお話をしたのは、そんな研究大会の喫煙所。先生とお話ししようと思えば喫煙所を探したものです。

その喫煙所で恐れ多くも石川さんに「全国区で活躍したい」といったところ、「理事に立候補してください」といわれ、2009年に協会理事に就任させていただきました。就任後は研究大会だけでなく理事会の休憩時間にも喫煙所でお話する機会が増え、リハビリテーションマインド、新しい情報、裏話など多くを教えてくださいました。

私たちにとって喫煙所は、石川先生とコミュニケーションをとる恰好の場所でした(宴会もでしたが)。しかし、私が病気で喫煙所に行かなくなり、その後コロナ禍となり研究大会が相次ぎ中止、理事会はWebに切り替わり、その機会も減っていきました。

そんな中、石川さんの訃報をお聞きし、もっといろいろお話をお聞きしたかったなと残念に思っています。どうか安らかにお眠りください。

合掌

1998年夏、高知にて

たかはし ひろたつ
高橋 博達

浜松市リハビリテーション病院 副院長

脳外科医師を卒業した僕は駆け出しのリハビリ科医師として高知の地を踏んだ。近森病院と併設施設の見学行脚の旅であった。近森のリハビリシステムは石川さんが作り上げたりハビリのユートピアである。急性期病院の隣にリハビリ専門病院、その横のビルに外来・訪問リハビリと住宅改修部門、老健が入居した在宅総合ケアセンター。20年後の日本を先取りしていた。

1週間の滞在中は、毎晩の歓迎会でもてなされた。

療法士A「ここでは急性期病棟、リハビリ病棟、訪問・外来・老健とすべての業務を数年で体験できます。そこまで学んで地元に戻っていく仲間も多いです。皆地域で頑張ってます」

療法士B「養成校で石川先生の話聞いて就職を決めました。皆そうです。熱くて似た者同士ですよ！」

看護師C「石川先生って、夜勤帯に歩行介助してくれるんです。先日もおばあちゃんが廊下の途中で間に合わず失禁してしまったんですが、先生はその時、『すごいよ〇〇さん、きのうはこの半分しか歩けなかったよ。今日はここまで来られたね！』って、逆に褒めるんですよ！」

石川さん「高橋くん、これからリハビリは変わるよ。僕はね、高知でできたことを東京でやりたいんだ。東京でできれば日本が変わるからね」

居酒屋の主人D「なに誠ちゃん東京に行くの？ それは認められんな。“誠ちゃんが東京に行くのをやめさせる会”を作らないとな……」

20年以上前、酩酊した脳に刻まれた会話のはずだが、昨夜のこのようだ。

厳しくも優しい指導 人間味を尊敬

きど まみこ
城戸 麻三子

初代看護委員会委員長 元 湯布院厚生年金病院 看護部長

退職し10年が過ぎ、石川先生と直接お会いする機会もなく過ごしておりました。テレビの「カンブリア宮殿」に出演されている先生を久しぶりに拝見していたので、この度の突然の訃報にビックリいたしました。

思い起こせば2006年、協議会の研修委員会から独立した看護委員会の一員として、先生に出会いました。看護職の役割に理解を示してくださる先生から、会議では厳しい意見もいただきましたが、常に先見の明をもってご助言・ご指導いただきました。特に、2007年より始めた回復期リハ看護師認定コースでは日本看護協会会長に直接話を通し、著名な講師の方々を多数紹介いただき、120時間の研修をスタートできました。看護委員会主催の研修では必ず講師を務めてくださり、その度に映画『ベン・ハー』を例に「リハの本質は人権の回復」と熱く語られ、当時急性期病院から転勤したばかりの私に強い印象を与えました。厳しいばかりではなく、熱海での宿泊研修の懇親会で思いがけない隠し芸を見せていただき親しみを感じたものです。委員会を通じて厳しくも優しくご指導くださった、人間味溢れる石川先生を尊敬する者として、心よりご冥福をお祈りいたします。本当にありがとうございました。

動く歩道の上の持久走

もろふし えつこ
諸伏 悦子

NTT東日本伊豆病院 元看護部長

初めて言葉を交わしたのは1994年に地域在宅ケア視察の際、コペンハーゲンの人魚姫の像の前で「一緒に写真をお願いします」とお声をかけた時です。はにかんだ笑顔が印象的でした。

2006年に看護委員となり、毎回石川さんのお話が楽しみでした。日本中同じリハ・ケアが受けられるよう「ケア10項目宣言」を掲げ、ケアの水準を一定に決めて、それを守っていく。「同じことを繰り返しやって一定の質が保たれていることは質が良いことの証」。この言葉はいつも立ち返る原点でした。2007年の24時間1分間タイムスタディは石川さんの熱い説得に勢いをもらい、病院中を巻き込んだお祭りのような実態調査でした。看護必要度をもとに診療報酬を獲得する実践が看護管理の新たな醍醐味となりました。この年、回復期リハ看護師認定コースの企画に着手、09年には念願の1期生が誕生しました。「看護がだめならすべてだめ、回復期はそう。基盤となる看護がしっかりしなくては」。いつも背中を押していただきました。

思えば看護委員全員、動く歩道の上を持久走しているような日々でした。息切れしているの楽しくて面白くて、次の目標を求めてもっともっと走っていたい……。石川さんは人をその気にさせるのがほんとに上手で、何をどう頑張ればよいかを看護師自ら検討する場を与えてくださいました。お元気なお姿ばかり思い出されます。ご冥福をお祈りしております。

石川さんの一言ですべてに合点

いかわ
猪川 まゆみ

鵜飼リハビリテーション病院 副看護部長

大学病院と一般病院で15年間、病棟の看護と在宅での看取りの訪問看護に携わったのち、師長をしていた一般急性期病院に回りハ病棟ができて、私のリハビリ看護が始まりました。

3年後にできた初台リハ病院に入職した当初、リーダー層が度々集められ「どのような病院にしたいか」などについて石川さんたち幹部と侃侃諤諤^{かんかんがくがく}の激論を交わしたこともよい思い出です。

その一方で、私自身はまだ、「リハビリ看護の本質がとらえ切れていない」と感じており、病棟では活気溢れる大勢のセラピストに気押され、混沌とした日々が続きました。

そんなとき、「看護は、すべてのリハビリの産みの親なんだ！」と石川さんが明言してくれたことがあり、この一言ですべてに合点がいました。セラピストの誕生以前から看護があり、その役割も担ってきた。全身状態の管理、生活の再構築など良質な看護抜きにはリハビリは成立せず、リハビリ看護はすべてのリハビリの基盤なのだ、と今では自信をもっていい切れます。

14年間回復期リハビリ病棟協会の看護委員として走り続けられたことや、21年間回復期リハビリ病院で継続してやれているのは、原点に戻ってリハビリ看護の素晴らしさに気づかせてくれた石川さんのあの言葉の賜物です。

石川さん、本当にありがとうございました。これからも石川さんの遺志を継いで、リハビリ看護を発展させていきます！ 石川 誠氏のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

さっそう
颯爽と帰る後ろ姿を見送る

いとう ゆみこ
伊東 由美子

長崎リハビリテーション病院 医療安全管理部部長 看護師

石川先生と最初にお会いしたのは20年前。私は急性期病院にいてリハスタッフとともに病棟でのリハ・ケアを模索していました。ある時、高知の近森リハ病院を見に行ったらどうかといわれ、私とPT二人で近森リハに1週間見学に行くことになりました。その時、当時の総婦長の田村さんのご配慮で石川先生とお話する機会をいただきました。1時間ほどお話ししてくださり、「リハビリは看護なんだよ」といわれたことを覚えています。とてもやさしい眼差しでした。私がリハ看護に興味をもち、傾注していくきっかけでもあります。

そして、最後にお会いしたのが一昨年のリハ看護認定コース。講義が終わりいつものように玄関でお見送りするとすぐに戻ってこられ、「講義はこれで最後、よろしくね」といわれました。私が「えー困ります。リハマインドは先生です」といっても「終わりだよ、講義する人はいる」といわれ颯爽と帰られました。私はその後ろ姿をただぼーっと見つめながら頭の中では困った困ったと思うだけでした。最後の講義の中で先生は「患者さんの評価は看護師がやって、セラピストはそれを聞いて『こういう援助をしたらいい』と看護師に伝えるのがちょうどいい」と話されていました。これがチームを創るコツなんだと改めて思いました。私にとって石川先生は最初から最後まで超カッコいい方でした。心よりご冥福をお祈りいたします。

私のリハビリテーションマインドは石川さん

いちのみや よしみ
一宮 禎美

NTT 東日本伊豆病院 看護部長

「医師を先生と呼ばずに～さんに統一！ 皆が専門性を発揮するためにチームの仲間とフラットな関係であるべきだから」。この言葉に驚いたと同時に石川 誠先生に「石川さん」と声をかけた時は緊張したことを思い出しました。私のリハビリテーションマインドは石川さんでした。急性期病棟から異動になり、リハビリテーションがわからず、看護の専門性が見出せずにいた時に石川さんの講義を受講しました。人としての尊厳の保持、そのためにはまず寝・食・排泄・清潔の分離と力強く宣言されました。「ベッドは寝るところ、食事は食堂で、排泄はトイレで、お風呂は浴槽へ……」。人として当たり前のことですが、入院した患者さんはこの当たり前ができていなかったことに気づきハッとしました。この言葉がなかったら、私は命を助けるだけで生活をみることができないう看護師になっていたと思います。幸い石川さんに出会うことができ、さらに看護介護委員として毎年石川さんのリハビリテーションマインドの講義を受講できたのでおれずに今までやってこられました。ありがとうございます。

「24時間 365日、患者さんのケアに責任をもっているのは病棟の看護師」「回復期リハ病棟の中核は看護！」の言葉にいつも勇気づけられました。

まだ信じられなくて、受け止めきれずにいます。ご冥福をお祈りいたします。

石川 誠先生との出会いから今

いで しんじ
井手 伸二

長崎リハビリテーション病院 副院長 理学療法士

長崎での初めての出会い

20数年前のこと。長崎で行われた石川先生のご講演のあと、当時私が勤務していた急性期病院で実践しているリハビリテーションの話をおそらくがむしゃらにしたのでしょう。「明日病院を見に行くよ」と先生。翌朝早く、お一人で来院されました。私はまさかのことと緊張しまくり。とにかく急性期で実践している理学療法やまとめたデータなど必死に説明したことを覚えています。「素晴らしい。これはウチではできていない、やらないといけない。がんばれ！」の言葉をいただきました。

近森リハビリテーション病院での勤務

縁あって約5年間お世話になりました。石川先生の気持ち・思いの詰まった病院で多職種によるチームアプローチという貴重な経験を積ませていただきました。何より、よい先輩や後輩たちに支えられた高知生活でした。感謝しかありません。リハビリテーションをどのようにマネジメントするか、多職種で協働することの大切さ、今の病院運営の礎になっています。

長崎リハビリテーション病院の開設

高知から長崎に戻り、病院を開設して13年が過ぎた今、理念を実現する病院づくりができているのか……、地域に貢献できているのか……、自問自答。まだまだ……。

ボールをつなぐ

ごとう しんすけ
後藤 伸介

やわたメディカルセンター リハビリテーション技師部 部長

石川さんの生き様^{ざま}の象徴は、輝生会のクロスカントリースキー合宿ではないでしょうか。

ザ・体育会系！ といった感じで、患者さんも対等に参加し、厳しくも温かさに溢れた行事です。十分な基本練習もなしにいざ林間コースへ。一度入れば戻ることもできず、ゴールまで進むしかありません。石川さんは楽しそうにさっさと先に行ってしまう、「あれこれ考えるより行動しろ！ そうすれば何とかなる」とでもいわれている気がしました。スキーの合間には皆でラグビー。どこにそんな元気が……と私は傍観していましたが、皆が楽しそうにボールをつなぎ走り回っている姿に、石川さんのスピリットを感じました。この元気で熱意によって多くの同志が結集し、回復期リハ病棟が生み出された、そう感じたのを覚えています。

石川さんは常々リハマインドを口にされていました。それが何か、私はその答えに辿り着いていませんが、石川さんがいっていた「誠実、挑戦、利他、共生、チーム」は“誠の精神”として私の仕事の指針にさせていただいています。

石川さんはきっとまだまだ先のリハビリテーションを思い描いていて、その道半ばとなってしまったことは心残りだったと思います。しかし、石川さんがいつも私たちに投げかけていたボールは、協会メンバーがオール日本でしっかりとつないでいってくれると思います。私も、その一人となれるよう走っていきたいと思います。

座卓を囲んでの飲み会が最高

さとう こうじ
佐藤 浩二

当協会監事 和田病院

回りハ病棟の制度ができた 2000 年といえば、地方の温泉型リハ病院は否定され都市型のリハ病院への転換が叫ばれてきた頃である。制度創設の 2 年前には『夢にかけた男たち』が刊行され近森リハ病院での石川さんの活躍がレポートされ、「どんな人だろう」と興味を抱いていた。

当時の私は温泉型リハ病院の中堅管理職として四苦八苦していた。2000 年の制度発足直後には回りハ病棟を立ち上げ、研修会に参加し、自院への講師招聘で「元気・勇気」をもらい、温泉型病院でも「やるべきリハはある」との思いで仕事に取り組んだ。

2009 年の 2 月頃だったと思うが突然、「石川ですが、協会の理事になってもらえませんか」との電話をいただき理事、そして監事として現在に至っている。

石川さんといえば、理路整然とした講演で毎回「明日からもっと頑張ろう!」という気持ちを奮い立たせてくれた。でも、やはり飲コミュニケーションだ。それもテーブルではなく座卓、しかも日本酒。座卓を囲んでの世間話が最高であった。種々の話題が噴き出す中で、石川さんの人生観溢れるコメントは人生哲学構築の妙薬であったと思う。

長寿大国日本での 74 歳は早すぎる。もう少しリハビリテーションの発展、回りハ病棟の発展をこの世で見守っていただけてもよかったのではないか。

One for All, All for One の精神を大切に、微力ではあるがリハビリテーションのさらなる発展に貢献することをお約束してご冥福をお祈り申し上げます。



回復期リハビリテーション看護師第 1 期生に認定証を手渡す石川 誠会長（当時） 2009 年



講演の名手だった。上左：医師研修会 2010年 上右：看護・介護研修会 2019年



研修会の懇親会では参加者を鼓舞することを忘れなかった。医師研修会 2010年



左：石川会長時代の研修委員会
メンバー 2008年